法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-06

子供に対する性犯罪に関する研究の現状と展開(1)発生状況と犯人の特性

OCHI, Keita / 越智, 啓太

(出版者 / Publisher)
法政大学文学部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
Bulletin of the Faculty of Letters, Hosei University / 法政大学文学部紀要
(巻 / Volume)
54
(開始ページ / Start Page)
107
(終了ページ / End Page)
117
(発行年 / Year)
2007-03-20
(URL)
https://doi.org/10.15002/00002940

Hosei University Repository

子供に対する性犯罪に関する研究の現状と展開（1）

── 発生状況と犯人の特性 ──

越　智　啓　太

要　旨

本論では，近年話題になることの多い子供に対する性犯罪について，その研究の現状を概観した。第1にその発生状況について，日本とアメリカの現状を紹介した。ただし，子供に対する性犯罪にはかなりの暗数が存在し，現状把握は困難である。第2に子供に対する性犯罪者のタイプ分けについての研究とその流れを紹介した。第3に，子供に対する性犯罪のエスカレーションと再犯の問題の研究を紹介した。最後に，子供に対する性犯罪の対策を行っていく場合における，犯罪の現状や犯人の特性を解明することの必要性について述べた。

キーワード：子供に対する性犯罪；犯罪防止；犯罪捜査；再犯

1. 問　　題

近年，小中学生が被害者になる性犯罪が話題になることが多い。このような犯罪は，被害者である子供に，うつ，不安，悪夢，対人関係構築の困難，自傷行為，自殺未遂，摂食障害，薬物濫用など（Miller-Perrin & Perrin, 1999）の深刻な心理的な障害をもたらす場合がある。また，直接的な症状が生じなくても，被害者は，その不快な記憶をかかえながら，その後の人生を過ごしていかなくてはならなくなる。これに対して，犯人側には罪悪感が少なく，事件自体を過小評価していることが多い（Marshall, O'Sullivan, & Fernandez, 1996）。このような，加害者と被害者のアンバランスさが際だっているのが，子供を対象にした犯罪の特徴の一つだということが出来るだろう。

現在，多くの自治体や学校が子供に対する性犯罪の脅威を抱えており，このような犯罪の発生をどのように防いでいくのか，犯人を検挙していくのかが，地域の重要な課題となっている。その試みとして，現在，子どもに防犯ベルを持たせることや，地域安全（危険）マップ作り，PTAの巡回などのいくつかの実践が行われており実際にある程度の効果をあげている。しかしこれらの対策は，犯人側についての情報，つまり，この種の犯罪を行う人間がどのような特性をもち，どのような行動パタンを示すのかについての情報を，あまり考慮に入れずに作られたものである。そのため，対策が十分でなかったり，効率的でなかったりする場合も多い。今後，この種の犯罪を効果的に防止するためには，加害者側がどういう人物なのか，彼らがいったいどのような行動特性を持っているのかの情報を考慮することが重要であろう。しかし，本邦では，加害者についての研究があまり行われておらず，また，海外の研究についての紹介

本研究にあたっては平成16年度～18年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究C），および平成18年度法政大学特別研究助成金の助成を得た。

Hosei University Repository

もあまりなされていない。そこで，本論では，このような犯罪を行う加害者についての心理学的な研究の現状について概観してみたい。

2. 子供に対する性犯罪の現状

2-1 日本における子供に対する性犯罪の発生状況

子どもに対する性犯罪の具体的な罪種としては，強制わいせつ，強姦，強盗強姦，公然わいせつ事件，青少年育成に関する各種条例違反等が存在する。また，誘拐事件（いわゆる連れ回し事件，監禁事件を含む）に関しても，犯人と被害者間にあらかじめ面識がない場合にはそのほとんど（80%以上 90%近く）が性的な犯罪目的であるため（渡邊, 2006），性犯罪の一種としてとらえるべきであろう。

平成17年度の未成年者を対象とした強姦事件の認知件数は876人で強制わいせつ事件の認知件数は女子4,805人，男子167人である。このうち強姦の8%，強制わいせつの27.9%が小学生を対象にしたものである（法務総合研究所，2006）。しかし，性犯罪は，暗数がきわめて多いことが知られており，実際に発生している性犯罪がどの程度の数なのかを把握することはなかなか困難である。とくに公然わいせつ事件（性器露出犯など）は，被害者調査をした場合，かなりの数が報告されることや，全国的にかなり多くの学校や自治体で，問題にされていることなどから，きわめてありふれた犯罪になっている。

この種の犯罪の被害者は，女児である場合が多いが男児も被害者となることがある。男児の被害に関しては女児よりも暗数化しやすいと思われるために，実際の男女の被害比率の推定は困難であるが，およそ5%程度だという指摘もある。犯罪の発生時間は，全体の60～70%が午後3時から午後6時の下校時間帯，習い事の行き帰り，友人との遊びの時間帯に生じ，発生場所としてはマンション（中高層住宅），公園，道路上が多い（渡邊, 2006）。なお，日本の場合，電車などの公共交通機関内での強制わいせつ行為，いわゆる痴漢，が極めて多く発生している。これも子供が被害者となる場合が多い重要な性犯罪である。痴漢の暗数は極めて多く実態把握は困難である。

2-2 アメリカにおける子供に対する性犯罪の発生状況

アメリカの文献では，子供に対する性犯罪は性的虐待（child sexual abuse）として扱われることが多い。本邦における「性的虐待」という用語の使用が家庭内での性的な虐待（いわゆるインセスト incest）を指すのに対して，アメリカでのこの用語の使用は，日本における「性的虐待」と「子供に対する性犯罪」をともに包含する概念であるといって良いであろう。

アメリカでも，日本と同様にこの種の事件は暗数化することが多い。そのために，日本と同様に公式の犯罪統計のみでこの犯罪の実際の発生状況を知ることは困難である。そこで，これを知るために，何件かの大規模な被害者調査が行われている。これは，青年期～成人の被調査者に対して，自分が被害者となった性的な犯罪について報告させるというものである。この方法は，性犯罪の実数を推定する比較的優れた方法だとされている。現在までに行われた主要な研究としては，Kercher と McShane らによるテキサス研究（Kercher & McShane, 1984），Kilpatrick らによる南カリフォルニア研究（Kilpatrick & Amick, 1984），Moore らによるナショナルサーベイ（Moore, Gallup, & Schussel, 1995）などがある。Russell & Bolen (2000) は，このような研究を9個あげて比較しているが，その結果，被調査者の5%～45%がいままでに何らかの性犯罪にあったと報告している。ここから家庭内のインセストと知人からの性的虐待を除くと被害率はおおよそ0.5～10%となる。ただし，これらの研究では，何らかの sexual contact があった場合を child sexual abuseと定義しているものが多く，いわゆる「露出狂」（性器露出犯）などの noncontact abuse については，被害に含まれていない調査もある。

Hosei University Repository

3. 子供に対する性犯罪者の特性

3-1 子供に対する性犯罪者の特性

子どもに対する性犯罪者についての一般のイメージは dirty old man（汚い年配の男）であるが，実際に検挙された犯人はこのようなイメージとは大きく異なっている。日本の研究では，子供に対する性犯罪の犯人は，年齢層としては，10 代から 30 代までで約 7 割を占めている。高齢犯もいないことはないが，典型的なタイプではない。また，ほとんどの犯人が住居を持ち，しかも，独居のものは少なく，多くは配偶者や親と同居している。無職者（学生，生徒等を除く）は全体の 25 %程度に過ぎない（これに対して一般刑法犯全体では 34.5%が無職者である）。薬物の問題や精神障害をかかえていることは少ない（渡邊, 2004）。検挙した犯罪者が同種の前歴を持つ可能性は 3 割程度で，一般の認識よりは低いように感じられるが，これは事件のうち，10 代の犯人が多くを占め，これらの世代の犯人は初犯のものが多いからである。一般には，年齢層が高くなるほど再犯率の数値は大きくなる。それゆえ，この種の犯罪では，ある程度の常習性があると考えてよい。このような傾向はアメリカでもほぼ同様である（Araji, 2000）。

3-2 若年の性犯罪者の問題

上記に引用した渡邊（2004）のデータでは，本邦のこども対象の性犯罪のうち，10 代の犯人（中高生が犯人の場合など）の占める割合は，幼少児誘拐，強制わいせつで 26.7%，年少者強姦で 30 %であるが，10 代の犯人の場合，犯人が他の年齢層の場合に比べて，（被害者が身近な人物であることなどから）暗数化する場合も多いので，実際はもっと多い可能性がある。海外の研究では，すべての性犯罪の 15～20%が若者によって引き起こされているのに対して，子どもに対する性犯罪を引き起こしているのは，50%程度が 18 歳以下であるという指摘もある（Davis, & Leitenberg, 1987; Furby, Weinrott, & Blackshaw, 1989）。さらに多くの性犯罪者はその犯罪を少年期から行っているということも指摘されている（Abel, Mittelman, & Becker, 1985）。彼らが最初にこのような犯罪を行った年齢は平均 13～14 歳，また，25%程度が 12 歳以前であることも示されている（Metzner & Ryan, 1995; Ryan et al., 1996; Weinrott, 1996）。Weinrott（1996）によると子どもに対する性的犯罪を行う若者は，男女両方を被害者にする場合はまれで（これにたいして，年齢の高い犯人の場合には，男女両方を対象にして犯罪を行うものが一定割合いる），知り合いの女児か自分の姉妹を対象にする場合が多いという。たとえば，Davis & Leitenberg（1987）は，75 %の犯人が知人や親戚の子供に対して犯行を行うと指摘しているし，Ryan et al.（1996）は，40 %程度が自分と血縁関係のあるものに対して犯行を行い，全く面識のない人に対する犯行は，6%程度だと述べている。また，その手口は，オバートな攻撃行動よりも言語的な強制であることが多く（Ryan et al., 1996; Weinrott, 1996）。この強制は被害者の年齢とともに増加する（Becker et al. 1996）。このタイプの性犯罪については，現在のところ，あまりわかっていないことも多いが，もし，若年層の性犯罪者の一部が，常習化していくのならば，比較的初期の段階で，これらの犯罪者を発見し，そのリスクを査定して，適切な矯正手法を開発していくことが必要かもしれない（Worling & Langstrom, 2006）。

4. 子供に対する性犯罪者のタイポロジー

4-1 子供に対する性犯罪者の分類に関する従来の研究

前節では，子どもに対する性犯罪者の全体的な属性について概観した。しかし，実際，個々の性犯罪者は，同じようなタイプばかりではない。実際には，その行動パタンや欲求の違いなどを異にする複数の下位タイプが存在する。このような下位タイプをカテゴライズすることは，子どもに対

Hosei University Repository

する性犯罪の特徴を把握するという意味でも，また，犯罪捜査場面において，犯人像を絞り込んでいく意味でも重要な問題となってくる。そこで，現在までにこのような性犯罪者を分類するいくつかの枠組みが提案されている。

この試みの最初のものは，Groth & Birnbaum (1978) によるものである。彼らは，子どもに対する性犯罪者を固着型（fixated）と，退行型（regressed）に分類した。前者は，「基本的，持続的に性欲が子供に向けられているもの」である。後者は，「子供との性的な関係がストレス状態に迫られた結果であり，本来の同世代の人に対する性的志向が明らかに逸脱した」タイプである。

その後，行われた多くの研究が，彼女らの分類を踏襲している。例えば，Deitz (1983) は，ほぼ同じ類型をそれぞれ，性癖型（preferential）と，状況型（situational）として分類している。彼は，このうちの前者が精神病理学的なものであること，実際にはこのような嗜好を持っていたとしても性犯罪者になるのはごく一部であることを強調している。Johnston (1997) は，固着型と退行型に性犯罪者を分類した上で，それぞれのタイプが思考パタンを始め，さまざまな点で異なっていることを明らかにしている。また，犯罪捜査の文脈では，Lanning (1986) が，Dietz と同様の分類を提唱しており，この分類は4度にわたって改訂され，アメリカ連邦捜査局（FBI）などで実際の捜査において用いられている。近年の研究は，この2分法をさらに細かな下位分類にわけるという方向と，カテゴリーに分類せずに連続体モデルで分類するという方向に発展している。

4-2 子供に対する性犯罪者のマサチューセッツ治療センター分類

まず，前者のものであるが，近年，良く使用されているマサチューセッツ治療センター（Massachusetts Treatment Center, MTC）分類は，次のような4タイプの分類を行っている。まず，未熟型（immature pedophile）である。このタイプの犯人は，成人との人間関係を築くことが困難であり，社会的に未成熟で，依存的で，臆病で，対人的なスキルも低い。被害者となる子どもは性的な対象というよりも，仲良しの友人と考える。被害者は女児に限らず男児の場合もある。性的な接触は，その子どもとの関係が築かれた上で初めて行われるが，性交が行われることはそれほど多くない。子どもに対して身体的危害を加えることは少ない。退行型（regressed pedophile）は，社会的に問題がない人物であるように見え結婚していることもあるが，何らかの失敗体験や自信喪失（性的なものも含む）をきっかけとして子どもに対して性的な関係を求めるようになるタイプである。このタイプは，被害者として女児を対象にし，また性交を行おうとする場合が多い。搾取型（exploitative pedophile）は，反社会的なパーソナリティを持ち，自らの性的欲求を満たすために子供を利用するタイプである。彼らは，子供を誘拐し，監禁して，レイプを含む性的行為を行う。子供の人格には注意を払わず単なる欲求の対象として子供を扱う。サディスト型（sadistic pedophile）は，やはり，反社会的なパーソナリティの人物である。彼らは，性的な動機以外にもサディステックな動機を持ち，これを満たすために子供を誘拐，監禁して，性的，暴力的行為を行う。すべてのタイプの中でもっとも危険性が高いと考えられている。このタイプは性犯罪者の2%以下しかいないと考えられているが，子どもが死亡するケースが多く，ひとたび事件が発生するとマスコミなどで取り上げられる場合が多い。

この流れの研究は，現在，より細かなカテゴリーを設定し，子どもに対する性犯罪者を正確に分類しようとする試みに発展している。たとえば，Knight (1990) は，MTC：CM 3（Child Molesters version 3）分類を提案している。これは，子どもに対する性犯罪者を子どもに対する固執度と，子どもに対する接触量の2つの軸で分類し，前者の軸についてはさらに社会性の有無，後者の軸については，子どもに対する身体的危害の程度によってさらに細かくタイプ分けしていくものである。この分類の妥当性については，Looman, Gauthier,

Hosei University Repository

& Boer（2001）などが確認している。

4-3　子供に対する性犯罪者の連続体モデル

次に後者の連続体モデルとしては，FBI の Lanning（2001）が提唱しているものがある。これは，子どもに対する性犯罪者（Lanning は，それ以外の一般の性犯罪にも適用可能だとしている）を状況型性犯罪者（situational sex offender）と性癖型性犯罪者（preferential sex offender）を両極とする直線上の一点に割り当てる方式である。そして，状況型性犯罪者に近づくほど，次のような特性を持つと考えた。つまり，低い知能，反社会的行動，サイコパス傾向，ナルチシズム傾向，衝動性，暴力ポルノを好むなどである。これに対して，性癖型は，高い知能，幼児性愛者，のぞき癖，サディズム癖，強迫的である。この分類は，タイプ分けのような類型論的アプローチでなく，特性論的なアプローチを指向している。

4-4　防犯の観点から見た子供に対する性犯罪者行動の分類

このような従来の研究は，実際の性犯罪者についての詳細な研究から明らかになってきたものである。しかし，子どもに対する犯罪の防止という観点から見ると，このような分類がそのまま有効に使用できるとは限らない。防犯への応用という観点からすれば，犯人がどのような特性を持った人物なのかといった問題よりも，犯人がどのように子供に接近し，どのような行為を行うかについての分類がむしろ必要である。この種の分類としては，Groth（1982）による，子供に対する性犯罪者の暴力使用の有無を基準とした分類がある。この分類では，子供に対する性犯罪者を，「基本的に子供を誘惑したり，強要する方法をとる非暴力的な」タイプと，「子供に被害を与えるために相手を脅したり，屈服させるような暴力的な」タイプに分類している。また，Cope（1997）は，Groth と同様なタイポロジーを提案しており，前者は「仲良し型」後者は「行きずり型」と呼ばれている。

本論では，犯人の行動をより詳細に分析し，以下のような犯人の行動の 4 分類を提案してみたい。まず，「仲良し型 A タイプ」である。このタイプは，子どもに対して徐々に時間をかけて接近し，仲良くなり，その中で，性的な行為を行うものである。先行研究の分類で言えば，未熟型，あるいは一部の退行型がこれに当てはまると思われる。公園などの子どもが多い場所に現れ，ひとりでいる子どもに接近し，時間をかけて仲良くなる。子ども文化にある程度詳しく，子どもにとっては親しみやすい大人であることが多い。徐々に接近することから，両親が子どもとのコミュニケーションを密にしていれば，犯人の接近を事前に察知することが可能であると思われる。次に，「仲良し型 B タイプ」である。これは，未熟型からサディスト型まで多くのタイプが該当すると思われる。基本的に初対面の子どもに対して，一度の性的な行為を行うタイプであるが，仲良し型 A と異なり徐々に接近するわけでなく，一度の接触で子どもを犯行現場に連れ出し，犯行に及ぶ。連れ出し方は，会話を利用しての詐術，具体的には，「迷っている犬を探して」，「コンタクトを落としたから探すのを手伝って」，「服が汚れているから直してあげる」，「そばの店で万引きがおきたから身体検査をさせろ」などといって子どもを連れ出すケースから，警察官や補導員を装っての半ば強引な連れ出しまでに及ぶ。熟練するほど，誘い方は巧みになるため，基本的に子どものみで対処することは難しい。子どもが単独で行動することを避けることや，大人の目を配置しておくことが防衛策となる。「連れ去り型」は，犯人としては，搾取型などを中心としているものであり，会話なども用いるが基本的には車などを用いて半ば強引に子どもを奪取し，犯行現場に連れて行くタイプである。このタイプの中には，被害児童の家に強引に侵入するタイプ，エレベーターや空き地などのスペースに強引に連れ込んで，犯罪を行うタイプ，凶器を用いて子供を連れ去るタイプが存在する。このタイプも，やはり子どものみでの対処は困難である。地域や行政が一体となった犯罪予防手段を講

Hosei University Repository

じることが必要であろう。「共犯型」は，共犯で子どもに対する性犯罪を行うケースである。従来，子どもに対する性犯罪は共犯で行うのは困難であった。なぜなら，子どもに対する性的な嗜好といった特殊な性癖を持ち，かつ，それを満たすためには犯罪を行っても良いと考える共犯者を見つけること自体が，困難であったからである。ところが，近年，インターネットなどの発展によりこの種の人々が容易に人間関係を築けるようになった。そのため，今後は共犯による子供を対象とした性犯罪も増加していく可能性があると思われる（ただし，性犯罪全体での共犯率は強姦で低下，強制わいせつで横ばいである。これは，いわゆる集団強姦が減少していることによる）。なお，共犯型は，連れ去った子どもを車で連れ回すが，犯行におよべず，解放するといった結果となることも多いが，実際，犯行が行われると，エスカレートする危険性があり，また，手口的に「連れ去り」型の犯行パタンをとることが多く，危険性は大きい。このタイプについては，上記の各対策に加え，幼児対象のポルノサイト規制などのより国策レベルでの対策も必要になると思われる。

5. 子供に対する性犯罪のエスカレーションと再犯

5-1 性器露出犯（exhibitionism）の特性

本邦では，比較的ポピュラーな性犯罪として子供に対する性器露出事件がある。このような事件が発生すると被害者は，自分がまた対象にされるのではないかという不安を抱き，また，学校や自治体では，この種の犯罪がエスカレートして，子ども対象のレイプ事件や，連れ去り事件，暴力事件にまで発展する可能性があるのではないか，と考える。この点については，どのような知見が得られているのか。まず，露出犯の特性についての研究を検討してみる。

まず，犯人はほかの性犯罪と同様にほとんどすべてが男性である。また，Abel & Rouleau（1990）は，142人の外来の露出犯を調べ，その犯行が若い年齢，つまり10代から始まっていることを明らかにしている。約50%が18歳までに最初の犯罪を行う。その後，20〜30代がこの犯罪のピークであり，40代になると減少する。彼らの知能や教育歴，職業，婚姻形態などは一般の人々と有意な差がない（Blair & Lanyon, 1981）。

露出犯の多くはいきずりの面識のない人を犯罪対象に選び，また，同じ被害者を狙うことは少ない（Bartol & Bartol, 2005），ただし被害者の年齢やタイプ（髪型や容姿の特徴など）が一定しており，出現する時間帯や場所が決まっているため，偶然的に同じ被害者が複数回被害に遭う場合もある。大人を被害者として狙う露出犯は，相手が一人の場合を狙うことがほとんどであるが，女児を対象にする露出犯は被害者がグループでいる場合にグループ全体に露出行為を行う場合がある（Evans, 1970）。露出犯の再犯率はほかの性犯罪に比べても非常に高い（Geenberg, 1998）。

5-2 子供に対する性犯罪のエスカレーション

性器露出犯の目的は，基本的にはその行為によって相手がショックを受けることによる性的な興奮である。そのために，被害者に対してレイプ行為に出ることや身体的攻撃に出る可能性は比較的少ないと考えられている（Bartol & Bartol, 2005）。また，露出犯はほかの性的な異常を併発している可能性が大きいが，それは，のぞき（voyeurism），痴漢行為（toucheurism あるいは frottage）が主であり，レイプなどに対する嗜好はそれほど多くないという指摘がある（Freund, Scher, & Hucker, 1983）。しかし，その一方で，子供に対するレイプなどの犯罪を犯した収監者を母集団とした研究では，彼らの多くがこれらの犯罪を犯す前に，性器の露出を行っていたことがあることが指摘されている。例えば，Longo & McFadin（1981）は，84人のレイプ犯と子供に対する性犯罪者を対象とした研究で，彼らの31%が，露出性犯罪の経歴があること，62%が青年期にのぞきか，露出の経験があることを示しているし，Longo & Groth（1983）は，128人の収監中の

Hosei University Repository

子供に対する性犯罪者を対象にした研究で，28%が青年期に露出性犯罪の前歴のあることを示している。Abel & Osborn（1992）は，治療のために外来通院している露出癖のある患者は，現実にこれ以上のわいせつ行為を行っていた経歴を持っていることが多いことに言及している。実際のところ，露出犯がそれ以上の犯罪へとエスカレートしていく危険性がどの程度あるのかは現在のところわかっていない（Murphy, 1997）。ただし，Gebhard et al.（1965）は古い研究ながら，露出犯の10人にひとり程度の割合で，レイプなどのより重い性犯罪を犯すのではないかと指摘している。

5-3 子供に対する性犯罪者の再犯リスク

エスカレーションの問題と並んで，問題となってくるのは，いったん検挙された後の再犯の問題である。近年，児童に対する殺人を伴う性犯罪などの重要事件を犯した犯人が，以前に同様の犯罪で有罪判決を受けていたことなどが指摘され，再犯リスクについての研究の必要性が高まっている。再犯リスク研究とは，一度捕まった性犯罪者が再犯するか否かを予測する要因を検討する研究である。性犯罪は，矯正困難で，再犯率が高いと考えられているため，現在まで，非常に多くの研究が行われてきている。たとえば，Quinsey, Harris, et al.（1995）は，ヘアのサイコパス尺度で測定された反社会的パーソナリティが前歴などともに，再犯率を予測する要因となっていることを示しているし，最近では，Firestone, Nunes, & Moulden（2005）が，BDHI（Buss-Durkee Hostility Inventory）で測定された敵意が再犯率と関連することを示している。この種の数多い研究をメタ分析したのが，Hanson & Bussiere（1996, 1998）である。彼らは，1995年までに行われた再犯予測の実証的な研究87編を収集し，そこに含まれている28,972人の性犯罪者のデータについて分析を行った。平均フォローアップ期間は，4-5年で，この間の再犯率は13.4%であった。その結果，再犯を最も良く予測する要因は，性的な逸脱の既往であり，とくに子供に対する性的嗜好の予測力が強かった（r=.32）。それについで，高かった要因は，性犯罪の前科（r=.19），反社会的パーソナリティ（r=.14），初回犯罪年齢（r=.12），結婚していないこと（r=.11）などであった。また，年齢（r=−.13）の要因も高く，年齢が低いほど再犯率が高いことが示されたが，一般性犯罪においては，低い年齢になるほどリスクが高くなる傾向が見られるものの，子どもを対象にした性犯罪では，犯人の年齢が50歳になるまで，再犯リスクの減少が見られないということも指摘されている（Hanson, 2002）。これらの要因に対して，子供の頃の性的虐待経験や，不安やうつなどの心理的問題，低いセルフエスティームなどは（一般的な常識と異なり）再犯と有意な関係が見られなかった。この結果は，性犯罪者に対する再犯防止は，カウンセリングなどの心理的問題の解決を志向する方向性よりも，環境の調整に焦点を当てた方がよいことを示唆していて興味深い。その後，これらの研究を元にして，客観的な指標を用いて性犯罪の再犯可能性を見積もる何種類かの測度が開発されており，その妥当性について検討が行われている（Barbaree, Seto, Langton, & Peacock, 2001）。

5-4 子供に対する性犯罪の再犯に関する「恥と罪」仮説

子どもに対する性犯罪の再犯のモデルにおいて興味深い仮説として「恥（shame）と罪（guilt）」モデルがある。これは，Bumby, Marshall, & Langton（1999）によるもので，性的な犯行のあとに加害者が恥の意識を感じるか，それとも罪の意識を感じるかによって，再犯可能性が異なるというものである（この理論における「恥」は，我々日本人の概念では，むしろ「恥ずかしい」というニュアンスである）。彼らによれば，恥の意識は，犯行の外的帰属，自己効力感の低下，適応的コーピングの減少，認知的な歪みの増大，被害者に対する共感の抑制などと関連しており，罪の意識はこの逆の心的プロセスと関連しているとい

Hosei University Repository

う。その結果として，罪の意識を感じる場合には犯行が抑制され，恥の意識が生じる場合にはその逆に犯行が促進されるというのである。類似した主張は，Roys（1997）などにおいても見られる。彼は，性犯罪者の恥の意識は感情についての処理を減少させ，その結果，被害者に対する共感性も抑制するとしている。Proeve & Howells（2002）は，子どもに対する性犯罪者は罪の意識を感じるよりは，恥の意識を感じることが多いと指摘しているが，もし，そうであるならば，レイプなどの性犯罪に比べて，子どもの性犯罪の再犯率が高いことを説明するひとつの理由となるかもしれない。

子供に対する性犯罪のエスカレーションおよび再犯のアセスメントは，犯罪の予防を考えた場合に極めて実用性の高い研究テーマである。この分野の研究は，アメリカにおいては比較的盛んであり，多くの研究成果が得られているが，本邦においては，それほど多くの実証研究が存在しない。この種の犯罪の防止のためには，本邦においてさらに研究を進めていくことが必要であろう。

6. 結　論

本論では，子どもに対する性犯罪者の特性についての研究について概観してみた。近年，増加しつつあるといわれるこの種の犯罪であるが，犯人にはさまざまなタイプがおり，それぞれ異なった行動パタンを示すことが示された。子供を性犯罪から守ったり，子供対象の性犯罪を捜査するためには，この種の犯罪や犯罪者を「子供に対する性犯罪（者）」とひとくくりにするのでなく，その分類とそれぞれのタイプごとの行動パタンを把握して，それに対応する活動を行っていくことが重要であろう。また，性犯罪のエスカレーションや再犯の問題に関してはまだまだ研究が不十分でありわかっていないことも多い。これらの問題については今後も引き続き検討していくとともに，犯罪の量や質に文化差が存在する以上，海外のデータに依存するのでなく本邦におけるデータを蓄積していくことが必要であろう。

引用文献

Abel, G. G., Mittelman, M. S., & Becker, J. V. 1985 Sexual offenders: Results of assessment and recommendations for treatment. In H. Ben-Aron, S. I. Hucker, & C. D. Webster (Eds.), *Clinical Criminology* Tronto, MMGraphics

Abel, G. G. & Osborn, C. 1992 The paraphilias: the extent and nature of sexually devient and criminal behavior. *Psychiatric Clinics of North America*, **15**, 675-687.

Abel, G. G., & Rouleau, J. L. 1990 The nature and extent of sexual assalts. In W. L. Marshall, D. R. Laws, & H. E. Barbaree (Eds.), *Handbook of sexual assalt: Issues, theories, and treatment of the offender*. New York: Prenum.

Araji, S. K. 2000 Child sexual abusers:a review and update. In L. S. Schlesinger (Ed.), *Serial offender*. Boca Raton: CRC Press

Barbaree, H. E., Seto, M. C., Langton, C. M., & Peacock, E. J. 2001 Evaluating the predictive accuracy of six risk assessment instruments for adult sex offenders. *Criminal Justice and Behavior*, **28**, 490-521.

Bartol, C. R., & Bartol, A. M. 2005 *Criminal Behavior (7th edition)*. Prentice-Hall（羽生和紀監訳「犯罪心理学」北大路書房）

Becker, J. V., Cunnningham-Rathner, J., & Kaplan, M. S. 1986 Adolescent sexual offenders: Demographics, criminal and sexual histories, and recommendations for reducing future offenses. *Journal of Interpersonal Violence*, **1**, 431-445.

Blair, C. D., & Layton, R. I. 1981 Exhibitionism: etiology and treatment. *Psychological Bulletin*, **89**, 439-463.

Bunby, K. M., Marshall, W. L., & Langton, C. 1999 A theoritical model of the influences of shame and guilt on sexual offending. In B. K. Schwartz (ed.), *The Sex Offender*. NJ: Civic Research Institute.

Cope, C. 1997 *Stranger danger: How to keep youe children safe*.（弓削俊彦訳「変質者の罠から子どもを守る法」人間と歴史社）

Davis, G., & Leitenberg, H. 1987 Adolescent sex offenders. *Psychological Bulletin*, **101**, 417-427.

Dietz, P. E. 1983 Sex offence: behavior aspects. In Kadish, S. H. et al. (Eds.), Encyclopedia of crime and justice. New York: Free Press.

Evans, D. 1970 Exhibitionism In C. G. Costello

Hosei University Repository

(Ed.), *Symptoms of psychopathology: A handbook.* New York: Wiley.

Freund, K. Scher, H., & Huckers, S. 1983 The coutship disorders. *Archives of sexual behavior,* **12**, 369-378.

Firestone, P., Nunes, K. & Moulden, H. 2005 Hostility and recidivism in sexual offenders. *Archives of Sexual Behavior,* **34**, 277-283.

Furby, L., Weinrott, M., & Blackshaw, L. 1989 Sex offender recidivism: A review. *Psychological Bulletin,* **105**, 3-30.

Gebhard, P. H., Gagnon, J. H., Pomeroy, W. B., & Christianson, C. V. 1965 *Sex offenders: an analysis of types.* New York: Harper & Row.

Greenberg, D. M. 1998 Sexual recidivism in sex offenders. *Canadian Journal of Psychiatry,* **43**, 459-465.

Groth, N., & Birnbaum, H. 1978 Adult sexual orientation and attraction to underage persons. *Archives of Sexual Behavior,* **7**, 175-181.

Groth, N. 1982 The child molester: Clinical observations. In J. R. Conte & D. A. Shore (Ed.), *Social Work and Child Sexual Abuse.* New York: Hawthorne Press.

Hanson, R. K. 2002 Recidivism and age: follow-up data from 4673 sexual offenders. *Journal of Interpersonal Violence,* **17**, 1046-1062.

Hanson, R. K. and Bussiere, M. T. 1996 *Predictors of sexual offender recidivism: a Meta-analysis.* (Cat No. JS 4-1/1996-4 E) Public Service and Government Service Canada.

Hanson, R. K. and Bussiere, M. T. 1998 Predicting relapse: A meta-analysis of sexual offender recidivism studies. *Journal of Consulting and Clinical Psychology,* **66**, 348-362.

法務総合研究所編 2006 犯罪白書 平成 18 年度版 法務省

Johnston, F. A., & Johnston, S. A. 1997 A cognitive approach to validation of the fixed-regressed typology of child molesters. *Journal of Clinical Psychology,* **53**, 361-368.

Kercher, G. A., & McShane, M. 1984 The prevalence of child sexual abuse victimization in an adult sample of Taxas residents. *Child Abuse & Neglect,* **8**, 495-501.

Knight, R. A., Carter, D. L., & Prentky, R. A. 1989 A system for the classification of child molesters: reliability and application. *Journal of Interpersonal Violence,* **4**, 3-23.

Kilpatrick, D. G. & Amick, A. E. 1984 *Intrafamilial and extrafamilial sexual assault: results of a random survey.* Paper presented at the Second National Family Violence Research Conference. (cited in Russell & Bolen, 1990)

Lanning, K. V. 1986 *Child Molesters: A behavior analysis.* VA: National Center for Missing and Exploited Children.

Lanning, K. V. 1993 Child Molester A Behavioral Analysis for Law Enforcement. in *Practical Aspects of Rape Investigation: A Multidisciplinary Approach.* CRC Press. (pp.201-256.)

Lanning, K. V. 2001 *Child Molester: A behavioral analysis* 4th ed. VA: National Center for Missing and Exploited Children.

Longo, R. E. & Groth, A. N. 1983 Juvenile sexual offences in the histories of adult rapists and child molesters. *International Journal of Offender Therapy and Comparative Criminology,* **27**, 150-155.

Longo, R. E. & McFadin, J. B. 1981 Sexually inappropriate behavior: development of the sexual offender. *Law and Order,* **29**, 21-23.

Looman, J., Gauthier, C., & Boer, D. 2001 Replication of the Massachusetts treatment center child molester typology in the Canadian sample. *Journal of Interpersonal Violence,* **16**, 753-767.

Marshall, W. L., O'Sullivan, C., & Fernandez, Y. M. 1996 The enhancement of victim empathy among incarcerated Child molesters. *Legal and Criminological Psychology,* **1**, 95-102.

Metzner, J. L. & Ryan, G. D. 1995 Sexual abuse perpetration. In G. P. Sholevar (Ed.), *Conduct disorders in children and adolescents.* Washington DC: American Psychiatric Press Inc.

Miller-Perrin, C. & Perrin, R. 1999 *Child Maltreatment.* Thousand Oaks: Sage Publications.

Moore, D. W., Gallup, G. H., & Schussel, R. 1995 *Discriplining children in America: A Gallup Poll report.* Princeton: Gallup Organization (cited in Russell & Bolen, 2000)

Murphy, W. D. 1997 Exhibitionism. In D. R. Laws & W. O'Donohue (Ed.), *Sexual Deviance.* New York: Guilford.

Proeve, M., & Howells, K. 2002 Shame and guilt in child sexual offenders. *International Journal of Offender Therapy and Comparative Criminology,* **46**, 657-667.

Hosei University Repository

Quinsey, V. L., Harris, G. T., & Rice, M. E. 1995 Actuarial prediction of sexual recidivism. *Journal of Interpersonal Violence,* **10**, 85-105.

Ryan, G., Miyoshi, T. J. O., Metzner, J. L., Krugman, R. D. & Fryer, G. E. 1996 Trends in a national sample of sexually abusive youth. *Journal of the Academy of Child and Adolescent Psychiatry,* **35**, 17-25.

Roys, D. T. 1997 Empirical and theoretical considerations of empathy in sex offenders. *International Journal of Offender Therapy and Comparative Criminology,* **41**, 53-64.

Russell, D. E. & Bolen, R. M. 2000 *The epidemic of rape and child sexual abuse in the United States.* Thousand Oaks: Sage

渡邊和美 2004 年少者強姦事件の犯人像 渡辺昭一（編）捜査心理学 北大路書房

渡邊和美 2006 子どもの犯罪被害の実態 岡本拡子・桐生正幸（編）幼い子どもを犯罪から守る 北大路書房

Weinrott, M. R. & Saylor, M. 1991 Self report of crimes comitted by sex offenders. *Journal of Interpersonal Violence,* **6**, 286-300.

Worling, J. R. & Langstrom, N. 2006 Risk of sexual recidivism in adolescents who offend sexually. In H. E. BarBaree & W. L. Marshall (Eds.), *The Juvenile Sex Offender (2nd).* New York: Guilford Press.

Hosei University Repository

《Summary》

Current Perspectives on Sex Offences against Children (1)

OCHI Keita

In the present paper, recent controversial researches on sex offences against children were reviewed. Firstly, the state of occurrence of those crimes in Japan and United States were compared. It was found to be difficult to reveal the actual situation because there was a considerable "dark number" of offences. Secondly, researches on the typology of sex criminals against children were reviewed. Thirdly, researches on the problems of escalation of sex offences and recidivism were reviewed. Lastly, the necessity that the actual situation of offences and the characteristics of criminals were to be revealed in order to work out countermeasures against sex offenses was discussed.

Keywords: Child Molester ; Crime Prevention ; Criminal Investigation ; Recidivism